

---

 書 評 ・ 紹 介
 

---

Stanley K. Smith, Jeff Tayman and David A. Swanson

*State and Local Population Projections: Methodology and Analysis*

Kluwer Academic, 2001, 426pp.

近年、わが国においては自治体ごとに少子高齢化に対応するための行動計画の作成を義務づけられていることなどから、地域別の将来人口推計に対する需要が急速に高まっている。残念ながら、こうした状況のなかでもわが国では小地域推計に力点を置いた書はこれまでほとんど出版されていない。本書はタイトル通り、アメリカの州やカウンティなどの行政単位における将来人口推計に関して体系的に整理されており、とりわけ地域レベルの推計作業に従事する実務者にとって、必携の参考書といえるだろう。

本書は全部で15章から構成されている。第1章において目的・意義等が記された後、前半部分では主としてコーホート要因法による推計について、その構成要素である出生・死亡・移動に関する指標を含めて解説されている。中盤では、トレンド外挿法や経済・都市に関する変数を取り入れた構造モデルといった、コーホート要因法以外の主要な推計手法についての記述がなされている。さらに終盤にかけては、特に小地域将来人口推計を念頭に置きつつ、それぞれの推計手法の長所・短所について多角的に検討され、近年における推計手法の新展開の紹介で結ばれている。

数ある推計手法のなかで、あえてコーホート要因法についての解説を最初に据えてあるのは、それが今日最もよく利用されている将来人口推計手法であることのほか、出生・死亡・移動の人口変化をもたらす三要素を手法のなかに含んでおり、理論的に明快であることが挙げられよう。これらについて初めの部分で丁寧に触れられているため、後述の他の推計手法に対する解釈も容易になるなど、章の組み立て方も優れている。

全体として平易な表現のなかにも、将来人口推計の手法だけでなく、手法を利用する際の留意点などに関連するきわめて多くの情報が入手できる。実際評者が市区町村別将来人口推計の作業を行っていた際に、小地域推計特有の難しさを痛感したが、本書の後半部分では推計に伴う問題点にもくまなく触れられており、手法を立案するうえで非常に参考になった。それらの点を強調した分、近年新たに開発されている将来推計人口手法の紹介部分の記述がやや物足りない感もあるが、未だ発展途上の分野でもあり、今後の研究成果が待たれるところであろう。

本書は、人口論についての予備知識がない場合でも、推計に係わる豊富な実例を交えた解説の流れのなかで必要な知識を身につけることができ、これから人口論を学ぼうとする方々にとっての入門書としても推薦できる。また、必ずしも入門的な内容にとどまらず、本書を読み終わる頃には、今日の将来人口推計手法に関する一通りの素養が備わるようになる。ここが本書の最も評価できる点であると考えられる。引用されている参考文献も多岐にわたり、読者の興味に応じて各分野の詳細な研究事例にあたることも可能である。

アメリカと日本ではデータ整備体系が異なるものの、書かれている内容は本質的にわが国の状況にも当てはまる。いうまでもなく将来人口推計には確実性が求められ、推計手法自体はこれからも洗練されていくであろうが、小地域推計については必ずしもそれとは呼応できない諸事情が存在する。既存の枠組みからは飛躍した発想が必要であるかもしれないが、本書では今日利用されている推計手法とその限界についての確に整理されており、今後の小地域推計の方向性を探るうえでも大きな手掛かりが得られる。

(小池司朗)